

「クライ！」

「どうしてだよ！ お前は好きなんだろ！」

「でも、そういうことするなんて信じられない！ だから、クライ！」

私の言葉に反応して母が来た。若干ニヤニヤ気味なのは気のせいかな？

「あんたも何を思っただんなことを言ったの」

「こいつが好きな歌手だっけ言うから、ディスク買ったのにさ、いらないうって言うんだよ」

「そうなの？ あんたも何を思っただ？」

いじいじ、指で床に丸を書く。そして、その質問に無精に答える。

「だっけさ？ 好きだよ？ その歌手は。でも歌なんて聞きたくないの。歌なんて好きじゃないの！ 私は元々、そんな生来じゃない！」

「難しい言葉使いますな。でも」

この部屋にある無数のディスクを母は見遣る。そして言う。

「こんなにその歌手のディスクがあるのはなんで？」

「そ、それは、弟が勝手に誕プレでくれるだけで……。私は買っただけじゃない！」

「大人買いをしてないっただけでしょ？」

「そんなんじゃない！ 私が買ったのは偶然なの！」

「じゃあ、今流れている曲の名前は？」

「自分に素直になれ」

「覚えられるんだね」

「偶然！」

「偶然でいつもコンポにディスクが入るんですね」

「そ、それは、声じゃないから、かな？」

「ええつと。まとめると、ディスクにデレてると」

「そ、それは……ごによごによ」

「実際にごによごによ言う人、初めてみたわ」

「う、うるさい！ とにかく、私はこのディスクなんてキライ！」

でも、流すのを止めないんですね、と母親は大笑いで弟も笑いを隠しきれていなかった。そして弟は呟いた。

この姉の表現をするときの慣用句は「キョクデレ」姉ちゃん、かな？ と。